東北タイにおけるアヒルの飼育体系

――コンケン県の灌漑地域を対象として――

平成２５年入学
派遣先国：タイ国
吉田　祐貴

キーワード：アヒル、定置、移動、家族労働力、飼料代、水供給

対象とする問題の概要

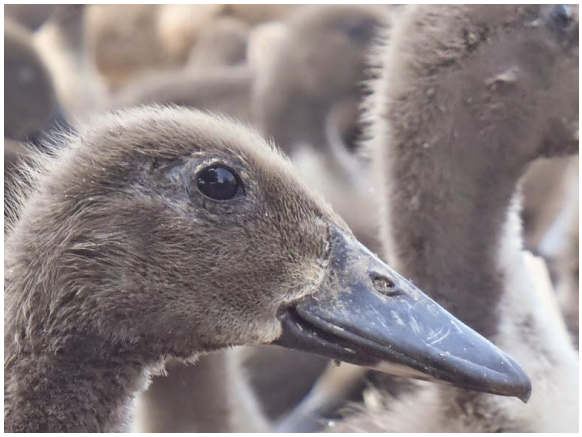

写真１：アヒル

近年では、鳥インフルエンザの関連で、アヒルが集中する中部タイを中心にその飼育体系が明らかにされてきた。

一方、今回の調査地である東北タイは、鳥インフルエンザの影響をほとんど受けてこなかった。しかし、現地のアヒルの飼育体系は今まで明らかにされてこなかった。

よって、東北タイの飼育体系を明らかにすることは、鳥インフルエンザの防止への重要な糸口となるとともに、小農による生産体系の維持・改善という観点で重要であるといえる。

アヒルは、中国や東南アジアを中心に伝統的に飼育されてきた家禽であり、タイでは、アヒルの肉・卵のどちらも好まれて食されてきた。

タイでは、工場で大量生産されるようになった、ブロイラー・産卵鶏とは対照的に、アヒルの飼育は、依然として小農の手によって担われている。

しかし、タイにおけるアヒルの飼育体系に言及した先行研究は少なく、研究の多くは複合農業の構成要素のとして報告されてきたに過ぎない。

写真２：アヒルの卵
（1 ケース＝30 個：120 バーツ＝約 400 円）

研究目的

本研究の目的としては、以下の四つがあげられる。

１．各アヒル農家の飼育体系の特徴と類型化
２．調査農村におけるアヒルの飼育体系の全体化
３．先行研究（中部タイ）との比較による、調査農村におけるアヒル飼育の特徴の明確化

４．調査農村における飼育体系の制約と課題の提示

本研究では、先行研究との比較を行う必要があるため、東北タイでも、規模の大きな（数百羽規模の）アヒル農家が多くみられる灌漑地域の農村を対象とした。

そして、目的の達成のため、現地への滞在調査を通じ、

①省庁が発行する二次資料の入手と分析

②現地の役所への訪問、村落データの入手と分析

③滞在期間中の参与観察調査、地図の作成、GPS を利用しての位置関係・空間分析

④アヒル飼育農家の世帯構成、世帯状況の把握

⑤アヒル飼育農家に対する、聞き取り・参与観察調査に基づく、アヒルの生産体系の把握

⑥他の農家からの聞き取り調査による、アヒル飼育の導入への制約の分析

の六つの観点から調査を進めていった。

写真３：エサに群がるアヒル

フィールドワークから得られた知見

調査農村においては、もともと稲作の栽培期・休閑期を問わずに自由に放し飼いをしてきた。しかし、今から 20 年ほど前に、化学肥料や農薬の投入量の増大、農地の境界の明確化などの動きが見られ、稲作期間のアヒルの放し飼いは難しくなった。そのため現在は、『完全定置型』と休閑期を利用した『定置―移動型』の二つの体系に移行している。

調査期間中（11 月～3 月）にかけて、アヒルの飼育を行っていた農家は 9 軒あり、うち 3 軒が『定置―移動型』の農家であった。移動を兼ねる農家は、定置型の農家と比較して、アヒルの飼育に対して多くの時間と家族労働力を割くことが出来る。これは、アヒルの放し飼いの際に、監視をする必要があることが大きく影響している。加えて、家族労働力の必要が他の農家のアヒルの飼育への参入の妨げとなっている。

写真４：定置型の農場（共有池に隣接）

写真５：移動型（休閑田）
※夜中はアヒルを田んぼの中に囲い込む

移動を行なう長所は、飼料コストの大幅な削減にある。市販の飼料の購入コストは卵から得られる収入の約半分にも及び、飼料代の節約はアヒル農家の純収益に大きく影響する。

一方の短所としては、長距離移動による死亡率の上昇がある。特に、産卵の開始前の雛の段階に個体数が減ることは、それまでの投資が無駄となるに等しく、その数が多ければ農家にとって大打撃となる。

もう一方の『完全定置型』の飼育体系をとる農家は、さらに二つの体系に分けることが出来る。一つは＜継続的＞、今一つは＜断続的＞の飼育体系である。二つの飼育体系の違いは、水の供給源の違いに起因している。

前者の農家は、村内にある共有池の周辺に住んでいる。共有池は年間を通じて、比較的安定した水位を維持することができる。したがって、年間を通じてアヒルの飼育を飼育することが出来る。

一方、後者の農家は、共有池からは離れたところに住んでいる。そのため、雨のほとんど降らなくなる乾季には、写真７のように水供給が不十分となることもあり、アヒルの飼育を途中で辞めるといった状況が生じる。

写真６：アヒルの移動
（夕方になると自分たちで戻り始める）

今後の展開・反省点

今回の調査から、アヒル飼育に関して、水、飼料、労働力の3つの要素が重要であることが明らかとなった。今後は、これらに着目しながら、各農家の生産体系をより細かく整理・分析していき、各実践の共通点・相違点を見出していきたいと考えている。

今回の渡航では、灌漑地域を対象とした。現在も農地の約8割が天水依存地域に属している東北タイにおいて、灌漑地域はいわば特殊な地域であるといえる。

加えて、今回の調査で、近隣農村への調査を行う中で、各農村における生産体系の違いも見られた。

したがって、今回の調査結果だけをもって、東北タイのアヒル飼育体系の一般化ができるのかには疑問が残る。

今後は、天水地域でのアヒルの飼育に関する調査が必要となるだろう。そして、灌漑地域との比較を通じることで、東北タイのアヒル飼育のより一層の一般化が可能となり、さらに灌漑地域の特殊性を浮かび上がらせることもできるだろう。

写真７：水が干上がってしまった池
（富栄養化→水質の汚染がすすむ）